

■ 論文 ■

面接調査の技法としての写真投影法 “Photo Projective Method as an interview technique”

岡本 卓也
(関西学院大学)

石盛 真徳
(京都光華女子大学)

加藤 潤三
(琉球大学)

■ 要 旨 ■ 本稿の目的は、面接調査の技法の1つとして、写真投影法 (Photo Projective Method: PPM) が持つ意味、可能性、限界について検討することである。PPMでは、調査対象者にカメラを渡し、何らかの教示を与え写真を撮らせ、写真に撮られたものを、自己と外界との関わりが反映されたものと見なすことによって、認知された環境 (外) と個人の心理的世界 (内) を把握、理解しようとする方法である。これまで写真投影法は都市計画、地理学、心理学などで用いられてきた。心理学分野ではカウンセリング場面や、子どもの安全意識の解明などに応用されている。これらを踏まえ、我々は写真投影法を面接調査に応用して、まちづくりに対する意識や地域との関わり、ライフヒストリーを尋ねた。その結果、面接場面における写真投影法の特徴として①投影的機能と概念化機能、②再評価機能と再発見機能、③語りの客体化機能、④関係形成機能といった点で従来の研究法よりも優れていると考えられる。また、PPMの問題点とその解決策について検討した。

■ キーワード ■ 写真投影法、面接調査、ライフヒストリー、コミュニティ

1 問題の所在と背景

本稿のねらいは、面接調査 (インタビュー調査) における写真投影法の可能性について検討することである。そこでまず、筆者らがこの手法を用いて行ってきた調査を例に、写真投影法の特徴を明らかにする。そのうえで、現在行っている面接調査への応用例を簡単に紹介し、いわゆる通常の面接調査法・ライフヒストリー研究法と比較した際のメリット・デメリットについて検討する。

1.1 写真投影法とは

写真投影法 (Photo Projective Method; 以下 PPM と省略) とは、「写真による環境世界の投影的分析法」である (野田 1988)。この方法では、調査対象者にカメラを渡し、何らかの教示を与え写真を撮らせる。そして写真に撮られたものを、自己と外界との関わりが反映されたものと見なすことによって、認知された環境 (外) と個人の心理的世界 (内) を把握、理解しようとする方法である。

PPM は、建築学や環境学をはじめとして、都市計画学、地理学、心理学などの多様な学問領域で用いられてきた。調査対象者に対して言語的に回答を求める代わりに、写真を撮ってもらうことで、撮影者の視覚的世界や心理的世界を写真という視覚的データを介して垣間見ることができる。

写真と言語という媒体を比べた場合、写真は実際の情景をありのままに再現することができる。そのため自由回答のような言語報告よりも、対象を具体的に表現できることから、多くの情報が含まれているといえる。さらに写真は、言語では表現し尽くせない、もしくは言語として概念化することが困難な視覚的イメージも伝達することができるのである。また、言語を基礎とした質問紙法では、調査項目の概念を共有していることを前提に、言語的な刺激（質問）に対する反応（選択）を測定しており、感性や情緒、イメージなど、概念化できないものの測定は困難であった。しかし PPM では、それらの概念化できない対象を読み取ることが出来るといえる。

Uwe (2001 = 2002) は、Barthes (1982 = 1986) のアイディアをもとに、写真を用いた社会調査における調査者と調査対象者の関係について次のような4つにまとめている。

- ① 調査者が調査対象者に写真を見せ、それについて質問をするもの
- ② 調査者が調査対象者をモデルとして撮影するもの
- ③ 調査者が調査対象者にある主題や時期に関する写真を見せるように頼むもの
- ④ 調査対象者が写真を撮っている間に、調査者がその様を観察し、被写体の選択について分析をするもの

PPM を用いた面接調査を考えてみると、調査者が、調査対象者に写真を撮るように依頼し、その写真をもとに質問をするという第⑤のタイプ、あるいは①と④の混合型といえるかもしれない。

このように、PPM を用いた面接調査法は、従来の写真を用いた調査法とは異なった点がある。そこで次節では PPM の特徴を明確にし、(面接調査に限定されない) 社会調査の技法としての PPM のメリットを確認する。そのため、第一著者が中心に行ってきた2つの研究例を紹介する。1つめは社会的ステレオタイプの測定の試みた研究である。2つめは子どもの安全意識を把握し、大人の安全意識との違いを明らかにするために行われた研究である。PPM を用いた調査、研究の網羅的なレビューは都筑 (2005)、林他 (2008a)、岡本 (2010) に詳しい。

2 写真投影法とその応用

2.1 写真投影法を用いた社会的ステレオタイプの測定

Okamoto et. al., (2006) は、PPM を用いて社会的ステレオタイプ (social stereotypes) の測定を試みている。社会的ステレオタイプとは、社会の中で共有されたステレオタイプのことである。例えば、Katz and Braly (1933) は、10カ国の人のイメージについて、様々な形容詞が当てはまるか否かをたずねた。その結果、どの国についても回答者の30%以上の人が選択する形容詞、即ち共有されるイメージが3～4個あることを見出し、社会的ステレオタイプの存在を指摘している。このように社会的ステレオタイプの測定ではもっぱら言語報告が用いられてきた。しかし、われわれが環境を認知する際には、言語のみならず、イメージそのものを媒介としていることが多く、言語を

用いた質問紙では、社会的ステレオタイプについて十分に測定しているとはいえない。

そこで Okamoto et. al., (2006) は PPM を用いることで、所属集団に対する社会的ステレオタイプの測定を試みている。彼らは 10 名の大学生にデジタルカメラを貸与し、「自分の大学らしい / らしくないと思う所」について撮影を求めた。その結果、撮影された対象には個人的反応と集合的反応として、大学のステレオタイプが反映されていた。また、PPM は言語による質問紙よりも多くの情報を含むだけでなく、自由度が高く、簡便な手法であるという利点が確認された。その上で、イメージ、ステレオタイプ、メタファー、象徴のような、幅広い内容を測定できる可能性があり、通常の質問紙や面接法のレベルでは伺いしれないものを PPM によって把握できることを確認している。

2.2 子どもの安全意識

岡本他 (2008a, 2008b, 2009a, 2009b)、林他 (2008b, 2008c, 2009) は、PPM を用いて、小学生とその親の危険認知の把握を試み、両者の危険認知の違いについて論じている。近年、地域安全マップの作製が盛んに行われているが、それらの多くは子どもの危険に対する認知を議論することなく作成されている。それらは、危険な場所や犯罪発生に特徴的な場所を事前に学習した上で、あらためて、子どもたちに校区内の危険だと思ふ場所を検索させるという方法で作成されているのである。そのため、子どもたちが毎日の登下校や遊びの中で何に怯え、何処を危険な場所と感じているのかを明確にすることなく、大人目線による危険箇所を子どもたちに学習させることのみを行ってきた。子どもの安全や安心のためには、子どもがいかに環境を認知しているのかを知った上で、それらの学習を行う必要があることはいうまでもない。一方で、子どもは自分の内面や考えを正確に言語化する能力を十分には備えていないことが多い。そのため、質問紙による調査によって、子どもたちの環境認知を知ることは困難であった。

そこで岡本他 (2008a, 2008b, 2009a, 2009b) は、小学生とその親にレンズ付きフィルムを渡し、通学路における危険だと思ふ場所、不安を感じる場所の撮影を依頼した。その結果、大人の危険認知の大半が道路や交差点といった交通に関するものであるのに対して、子どもは路肩の段差や暗がりといった対象に対して危険や不安を感じやすいこと、子どもの危険認知の対象が学年とともに交通に関するものが増えてくることなどが指摘された。言語による質問紙を用いた従来の研究では、子どもたちに、自分たちの意識を概念化、言語化させており、そのことによって見落とされてきた部分があると言える。これらの研究では、従来の調査では見落とされてきた、子どもの危険認知の特徴を明らかにすることが出来たといえるだろう。

2.3 PPM のメリット

以上のように PPM を用いることで、人が景観や環境をどのように認識しているのかといった点だけでなく、人が環境をいかに意味づけ、その環境の中でどのように暮らしているのかといった人と環境の関わり方をうかがい知ることができる。上記の研究例から、明らかになっている PPM のメリットをまとめると、次の 3 点を指摘できる。

1 点目は、簡便性と即時性である。内面的報告を、描画や言語報告によって行なわせる手法は、

調査対象者の描写能力や言語能力に依存する部分が多い。それらの手法に比べればカメラはブレなど技術に左右される部分が多少あるとはいえ、年齢や国籍を問わず誰もが簡単に扱える。また、PPMは、単に言語によらないということだけでなく、シャッターを押すだけというカメラの簡便さがゆえに、即時的な記録が可能である。レンズ付きフィルムをはじめ、近年のカメラは小型化が進み、容易に携帯できる。そのため、撮影をしたいと思ったその場で、瞬時に撮影できる。

2点目は、PPMが言語化の過程を含まない点である。つまり、多くの社会調査で用いられる言語による質問紙では、調査項目の概念を共有していることを前提に、言語的な刺激（質問）に対する反応（選択）を測定しており、感性や情緒、イメージなど、概念化できないもの、あるいは言語能力の問題から言語化され得ないものの測定は困難であった。しかしPPMでは、それらの概念化、言語化できない対象を読み取ることが出来る。子どもを対象とした調査でもPPMを用いることで、調査対象者の言語能力に依存することなく、誰もが簡単に参加できる。そのため、年齢を問わず実施可能であり、発達段階に応じた不安や危険認知を正確に知ることができる。

3点目は、個人の振り返りや教育効果が期待される点である。質問紙による調査を行った場合、調査対象者へのフィードバックは、計量的分析の結果を言語的に表現することになる。そのため研究者や関心の強い大人に対するフィードバックとして用いることは出来ても、関心の低い大人や子どもを対象にフィードバックするには適しているとは言えない。それに対してPPMによる調査のフィードバックでは、子どもたちは自分や友人が撮影した写真を見返す。そのため、自己関与度が高まり、危険にかんする理解が深まることが期待される。また、大学生を対象とした調査（岡本2009c, 林他2008a）では、改めて自分の所属する大学の価値を再発見すると行った声も多く聞かれていた。

以上の特徴やメリットを踏まえ、我々はまちづくりやライフヒストリーに関する面接調査において、PPMを応用することが出来るのではないかと考えた。

3 PPMを用いた面接調査の概要

3.1 調査の背景と目的

京都市中京区堀川通り以西の住宅地域は、これまで伝統的な地縁団体を中心としたまちづくり活動が活発に行われながらも、必ずしも一般住民の参加が活発ではなかった。この原因の1つとして、昭和以降に、丹後地方等の外部地域から多くの労働者が流入し定住した地域であることが考えられる。そこで、地域住民が生活の中で作り上げた場（景観や社会関係など）と人生における場の位置づけ、および今後のまちづくりに対する意識、これらの相互作用のダイナミズムを明らかにすることが調査の目的である。特に、当該地区に居住する高齢者の生活実態の把握およびライフヒストリーに焦点を当て、街の持つ機能と住民のまちづくりに対する意識の関係性について明らかにしていくことを主眼に置いている。

3.2 調査対象者

京都市中京区の朱雀第二小学校区、朱雀第四小学校区、朱雀第六小学校区の居住者に住む59歳

から 84 歳までの男女 16 名に対して、よりよい地域生活を築くための住民活動のための「生活実態調査」という名目で調査に協力してもらった。調査対象者は「京都市中京区暮らしの工房館¹⁾」の利用者に呼びかけ、参加の承諾が得られた人たちである。

3.3 調査の方法と教示

調査の手続きとして、まず、調査対象者にデジタルカメラを渡し、写真撮影を求めた。教示は次の通りである。「お預けしたカメラで、10 日間程度の中に、日常生活での立ち寄り先や、お住まいの地域での好きな場所や思い出深い場所の写真を、お好きな枚数分、撮影してください。写真のうまい下手にこだわらず、カメラを携帯いただき、思いついた時に撮っていただければ結構です。撮影された写真は、もしうまく撮れていないと思われてもデータを消去されずそのままにしておいてください。」

その後、2 週間ほど経て、京都市中京区暮らしの工房館に来てもらい、撮影された写真をパソコンに取り込んだ。そして 1 枚ずつパソコン画面に映し出された写真を共に見ながら、どこを撮影し、なぜ撮影したのかをひとりずつ尋ねた（図 1 参照）。適宜、職業や住居歴なども併せて尋ねた。

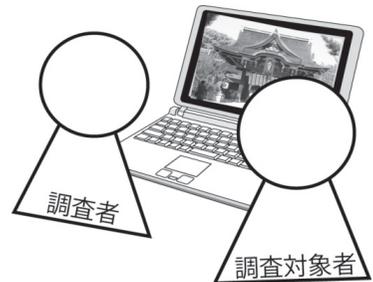


図 1 面接調査の様子

4 面接調査における PPM の可能性と問題点

まちづくりに対する意識や地域との関わり、生活実態やライフヒストリーに関する調査の詳細な

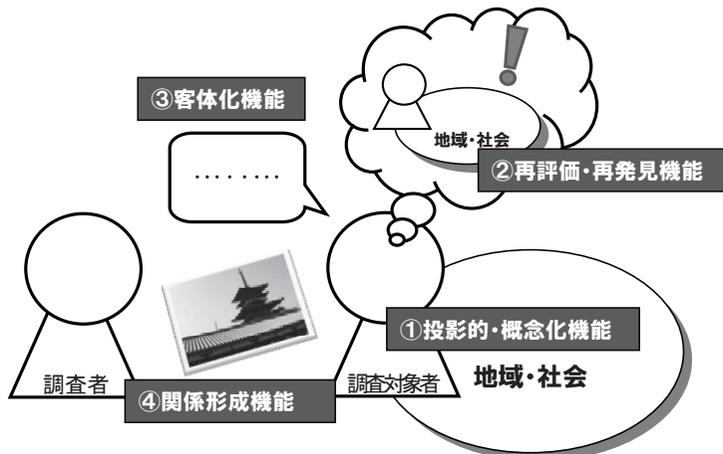


図 2 面接調査における PPM の 4 つの機能

1) 平成 17 年度から京都市が展開する、区役所・支所を中心とした地域レベルのまちづくり活動のための市民主体の活動拠点。地域の団体等との連携の下、空き家、空き店舗、集会施設など利用可能なスペースを活用した身近なまちづくり活動を目指している。

結果については、稿を改め報告し、本稿では面接調査における方法論としての PPM についてのみ言及する。

前述した PPM のメリットに加え、他の面接法よりも優れていると考えられる PPM の持つ機能をまとめると次の4つになるだろう。①投影的機能と概念化機能（話題の誘因と深化）、②再評価機能と再発見機能（ふり返りによる環境への気付き）、③語りの客体化機能、④関係形成機能（ラポール、対称的關係の形成）である。図2は、4つの機能を図示したものである。

4.1 投影的機能と概念化機能（話題の誘因と深化）

面接における PPM の利用に限定されるわけではないが、調査対象者が撮影した写真には、個人の環境に対する意味づけを読み取ることが出来る。Ziller (1990, 2000) は、自己を知るきっかけとして PPM を用いた調査を実施し、その結果から、個人の環境に対する志向性、すなわち環境内の何に関心を向けているのかを知ることが出来ると指摘している。本調査では、日常生活での立ち寄り先や思い出の場所、気になる場所を撮影してもらったわけだが、選ばれた被写体の多寡などからは、日々の生活の中で地域とどのように関わっているのか、また地域に対してどのような思いを持っているのかを知ることが出来る。例えば、警察官であった夫を昨年亡くした A さんが撮影した写真には、何気ない生活の一コマが撮影されているのだが、その多くは夫が行っていた防犯活動を通じて関わりを持つようになった場所であった。そこに写る人の多くも夫との活動の中で形成された人たちであり、夫と共に歩んできた地域との結びつきが写真と語りの双方に現れていた。また寂しさを紛らわすためであろうか、画面に飼い犬が映るものが多くあった。今は飼い犬と出かけることが多いそうである。

Schwartz (1989) は、農村コミュニティや家族についての面接調査を実施する際に、家庭内の出来事に関する写真を提示した。それによって、面接に付きまとう不自然さがなくなり、調査対象者の素朴な反応を引き出すことが出来たとしている。このように、面接を進行するための技法として写真を用いた研究では、調査対象者が明確に言語化、概念化できなかった内容が、写真という視覚的イメージを介することで、それを具体的に表現することが可能になることが示されてきた。本研究では、第三者あるいは調査者が刺激材料として用意した写真ではなく、調査対象者自身が撮影した写真を誘因材料として用いている。そのため、話題の誘因性の機能は極めて高い。自らが意識的、無意識的に選んだ撮影対象であるため、語りの拡がりが出てくるだけでなく、そこにまつわる思い出が喚起されることも多い。高齢者を対象とする心理療法の一つである回想法に生活写真を取り入れることが、高齢者の回想や語りを呼び起こすのに有効であるという指摘もある(志村他 2004)。

また、呉 (2005) は、面接調査における話題の拡がり方について、「子どものときのことで一番記憶に残る風景を教えてください」という質問では話題が拡がらないが、「どこで遊んでいましたか」と具体的に尋ねることで話題が拡がりやすいという例を紹介している。PPM の場合はさらに、写真をみながら、被写体として選ばれているものや、その背景となっているものについて「これはなんでしょう」と話題を振ることが出来る。このことが本人すら忘れていた出来事や思い出を語るきっかけになっていたようだ。自分が実際に撮影したものを、具体的に目にしながら語るのも、撮影時の自分の思いだけではなく、そこにまつわる思い出までも喚起されるようである。たとえば、

Bさんは毎日の散歩コースである学校のグラウンドを数枚撮影していたのだが、その写真を見ながら柔道部に所属していた頃の走り込みの様子や、友人達との冒険譚などへと話題が広がった。仕事を辞めたばかりの独身のBさんにとって、地域とのつながりを感じさせる1つの対象として、思い出のグラウンドがあるのだろう。

2.3節ではこれまで筆者らが行ってきた調査を踏まえ、PPMのメリットとして言語化の過程を含まないことを指摘した。しかし、面接調査では、写真を見るだけでなく、調査対象者の語りによって、意識や活動の実態、社会との関わりを知ろうとしている。そのため、言語化の過程を含まないというメリットは弱くなる。しかし、写真を見ることで言語化が促進され、語りを増やすことにつながっている。言い換えるなら、自分が撮影した写真が概念化装置の役割を果たしていると言えるだろう。自分の中で気がつかずにいたものを、写真を見ながら調査者に尋ねられることにより、そこにある意味を自ら見付け、言葉にすることが可能となる。

4.2 再評価機能と再発見機能（ふり返りによる環境への気付き）

PPMによる面接調査では、調査者と調査対象者が撮影された写真を共に見ながら、撮影の理由や被写体について語ってもらう。4.1節でも述べたように、そのことが話題を拡げ、より深い語りを引き出すことが出来る。しかし、それだけではなく、写真を撮影したときには気がつかなかった、その被写体に対する自分の思いに気がつき、自らを振り返るきっかけにもなる。先に紹介したBさんは、京都府外に働きに出ることも多く、地域とのつながりがほとんどないと語っていた。しかし、グラウンドの写真から始まった柔道の話題から、近隣住民の数名をあげ、「あいつらも自分が柔道の練習しとるのを、よく見とった」と、古くからのつながりがあったことを再確認しているようでもあった。曾他（2001）の調査でも、写真投影法による調査の実施後、調査対象者の地域に対する愛着が高くなることや、行動への動機付けが強くなることが指摘されている。写真を見ながら調査者に語る中で、記憶の奥に埋もれていた思い出が喚起されるのであろうか、何気なしに撮影された毎日の散歩の光景が、実は自分にとって意味のある大切な思い出深い場所であったと気がつくことも多い。

また、第三者から質問されることによって、自分たちにとっては当たり前であったことに対して、あらためて自分たちの地域あるいは自分や家族ならではのものと気付かされ、その価値を再評価することもあるようだ。例えば、街の持つ機能性についても再認識することもある。都市再開発によって作られた深夜営業のスーパーなどは、京都の古くからの景観という観点からどちらかと言えばネガティブな印象を持たれがちである。しかし、自分が撮影した写真を見ると頻繁に利用していることがわかり、「やっぱり便利になって良いね」と、良い側面にも目が向けられるケースもあった。

このように、地域の中での生活を撮影し、その写真を見返し、それについて語る、という一連のプロセスの中で、あらためて自分の生活する地域と自分との結びつきや相互作用に気がつくことは多い。さらに、街の持つ機能を再確認、再評価し、埋もれていた資源の活用もつながるだろう。

4.3 語りの客体化機能

PPMを用いた面接調査の場合、調査対象者の意味付けに対して、研究者はそれを客観的に読み

取ることが出来る。秋田他（2000）は、個人が意味づけを通して世界や自分を理解し、それに基づいて行動しているという側面に注目し、社会・臨床心理学における質的研究を行う際の重要なポイントについて次のように述べている。面接調査や聞き取り調査では、調査対象者の視点を学ぶことや、相互作用の中でどのような意味づけを行っているのかを知ることが大事であり、研究者の視点を括弧に入れておく必要があるという。なぜなら、面接調査や聞き取り調査では、調査者が持っている枠組みに沿った形で質問が行われ易く、研究者の主観が入り込む可能性があるからである。

PPM では、調査対象者は、自分自身が撮影した写真を調査者と共に見ながら、自分がなぜ撮影したのかという意味づけを行いながら語っていく。調査者はそれを聞き留めていくのである。つまり、調査対象者の写真が話題の嚆矢であり、話題を展開していくのも調査対象者自身である。調査者が相づちを打ったり、話を促したりということは行われるものの、調査者の枠組みで語りを捉えて展開していくことは少なくなる。

また、調査対象者自身も写真という媒体を通して語るため、自分の日々の生活行動や自分と地域関わりなどを客観的に見ることが出来る。単に自分ひとりで考えを巡らせたり、思い出に浸るのではなく、自分が撮影した写真を時間をおいて調査者とともに見るため、撮影時の自分について客観的に見つめることが出来る。そのため、4.2 節とも関連するが、街に対してだけではなく自分自身についての再発見にもつながりやすい。

4.4 関係形成機能（ラポール、対称的關係の形成）

面接調査や、ライフヒストリーの聞き取り調査において、調査者と調査対象者の関係性（聞き取りの際のラポール、オーバーラポールな関係や非対称性）についての多くの議論がなされている（桜井 2005 など）。そこで議論の重要な点の一つは、調査者と調査対象者が *be friendly but not too friendly*（桜井 2005）な関係を築くことにあるといえるだろう。PPM による面接調査は、従来のその問題を部分的には克服する可能性を有している。

PPM による聞き取りを行う際には、調査者と調査対象者双方が撮影された写真を見ながら語りが展開される。デジタルカメラか銀塩カメラかという違いによって、様子の違いがあるかもしれないが、本調査の場合は、デジタルカメラを用いていたため、調査対象者が撮影した写真をパソコンに取り込み、それをノートパソコンに1枚ずつ表示し、それを2人でのぞき込む形で聞き取りを行った（図1参照）。

そのため、研究者が対象者の実態を学術目的のために知ろうとしているというよりは、1枚の写真を通して共に語り合うという形式になる。つまり、調査対象者自身は、自分が撮影した写真を客観的にながめながら、被写体に対する自分の思いを語り、調査者も同じように写真を客観的にながめ、語りに耳を傾けるのである。写真という共通の媒体が間に入ることによって、アンバランスになりやすい二者間の関係を安定させるようでもある。もちろん、社会的な不平等やお互いの社会階層など、インタビュー関係の外部から生じる非対称性の問題を克服できるわけではないが、インタビュー関係の内部から生じる非対称性は生じにくいといえるだろう。

また、写真やPCを見ているためお互いの視線が合いすぎないという点も、重要な意味を持つであろう。対人関係と視線交錯に関する研究（Argyle & Dean 1965, 大坊 1982）では、相手との関係

性にも依るが、視線交錯が多すぎると居心地の悪さを感じやすいことや、視線交錯量と発言量との間に負の相関関係があることなどが指摘されている。適度に視線をそらすことの出来る環境が、会話を行うには最も心地よい関係を形成できるというのだ。そういった点からも、写真を媒介にして話を聞くことは、調査者と調査対象者の関係形成に役立つといえるだろう。

4.5 問題点と展望

もちろん、PPM を用いた面接調査に問題がないわけではない。まず、簡便性の低下である。数日間カメラを持ち歩いてもらった上で面接をするという方法は、簡便性が失われると言わざるを得ない。また、今回の調査では、地域での日常生活の活動実態をもれなく撮影してもらうという目的もあったために10日間程度という比較的長期の撮影期間を設定していた。その結果、調査対象者によっては、撮影した写真の枚数が数百枚にも及び、その撮影ポイントの確定作業に時間がかかり、調査対象者の負担となるという事態も生じた。対応策としては、小型のGPS ロガーを撮影時に同時に持ち歩いてもらい、撮影写真ファイルのJPEG-EXIF の時刻情報と同期させることが考えられる。単に撮影ポイントの確定作業を省力化するだけでなく、撮影地点を電子地図上にマッピングし撮影時の移動経路を視覚化することで、調査対象者へのフィードバック情報も豊かにできる可能性がある。

ただし、簡便性が失われる一方で即時性については高く、目の前の問題をすぐさま記録することが可能である。生活実態や地域に対する意識、あるいは地域の問題を質問紙などを用いて知ろうとすると調査対象者には大変な手間が掛かる。毎日の生活の中で紙と鉛筆を持ち歩き、その場その場でメモを残すことは現実的ではないだろう。また、自宅に戻ってから記録をするのでは、その時の問題意識や気持ちを忘れてしまうこともあるだろう。小型のデジタルカメラや携帯電話に付属するカメラを用いれば、その場で即時的に記録可能である。そういった日常の活動の中で見えてくる生活者の目線こそ、今後のまちづくりに活かすべきだろう。

2点目の問題点としては、現存している対象しか撮影できないという点である。大規模な区画整理などにより、街の構成そのものが大きく変更され、現在地を撮影してもまったく調査対象者の記憶にある過去とのつながりをその写真から見出せないというケースが存在する。喪失感の大きい調査対象者が、変貌を遂げた地域の写真を撮ることに意味を見いだせず、写真撮影に積極的になれないということも起こる。こういったケースでは、たとえば、調査対象者に過去の写真を持ってきてもらう、あるいは調査者側が過去の写真を用意して、現在の写真と比較しながら面接を行うことは可能であろう。あるいは通常のライフストーリーの聞き取りのみ行うことも検討すべきかもしれない。

上述したように、必ずしもPPM を用いた面接調査が、あらゆる場面に応用可能なわけではない。しかし、従来の面接調査や聞き取り調査にはないメリットも多く、従来の方法論で問題として上げられていた点もいくらかは克服している。また、地域との結びつきだけではなく、その対象を学校、家庭生活などへと変更し、応用することも可能であろう。本邦ではPPM を用いた調査研究自体がまだ少なく、PPM は未だ発展途上にある。今後、研究を蓄積していき、精緻化していくことで調査法の1つとして確立していきたい。

引用文献

- 秋田喜代美・能智正博, 2007, 『はじめての質的研究法: 事例から学ぶ 臨床・社会編』, 東京図書.
- Argyle, M., & Dean, J., 1965, "Eye contact, distance and affiliation." *Sociometry*, 28, 289-304.
- Barthes, R., 1982, *Camera Lucida. Reflections on Photography*, New York: Hills and Wang. (=1985 花輪光訳, 『明るい部屋』, みすず書房.)
- Dabbs, J. M. Jr., 1982, "Making things visible", In J. V. Maanen, J. M. Dabbs, Jr., & R. R. Faulkner (Eds.), *Varieties of qualitative research*, Beverly Hills, CA: SAGE. pp. 31-63.
- 大坊郁夫, 1982, 「二者間相互作用における発言と視線パターンの時系列的構造」『実験社会心理学研究』, 22: 11-26.
- 呉 宣児, 2005, 「語りに耳を傾ける」, 伊藤哲司・田中共子・能智正博(編), 『動きながら識る, 関わりながら考える—心理学における質的研究の実践』, ナカニシヤ出版: 77-91.
- 林幸史・岡本卓也・藤原武弘, 2008a, 「写真投影法による場所への愛着の測定」, 『関西学院大学社会学部紀要』 106: 15-26.
- , 2008b, 「写真投影法による危険認知の把握(1)」, 『日本グループ・ダイナミックス学会第55回大会』.
- , 2008c, 「写真投影法による危険認知の把握(3)」, 『日本社会心理学会第49回大会』.
- , 2009, 「写真投影法による危険認知の把握(7)」, 『日本社会心理学会第50回大会, 日本グループ・ダイナミックス学会56回大会合同大会』.
- Katz, D., & Braly, K., 1933, "Racial stereotypes of one hundred college students." *Journal of Abnormal and Social Psychology* 28: 280-290.
- 野田正彰, 1988, 『漂白される子供たち』, 情報センター出版局.
- 岡本卓也, 2010, 「写真投影法の概要」, 『集団間関係の測定に関する社会心理学的研究』 関西学院大学出版会: 55-64.
- Okamoto, T., Fujihara, T., Kato, J., Kosugi, K., Nakazato, N., Hayashi, Y., Ikeuchi, H., Nakagawa, N., Mori, K., & Nonami, N., 2006, "Measuring social stereotypes with Photo Projective Method." *Social Behavior and Personality: an international journal* 34 (3): 319-332.
- 岡本卓也・林幸史・藤原武弘, 2008a, 「写真投影法による危険認知の把握(2)」, 『日本グループダイナミックス学会第55回大会』.
- , 2008b, 「写真投影法による危険認知の把握(4)」, 『日本社会心理学会第49回大会』.
- , 2009a, 「写真投影法による危険認知の把握(5)」, 『日本コミュニティ心理学会第6回大会』.
- , 2009b, 「写真投影法による危険認知の把握(6)」, 『日本社会心理学会第50回大会, 日本グループ・ダイナミックス学会56回大会合同大会』.
- , 2009c, 「写真投影法による所属大学の社会的アイデンティティの測定」, 『行動計量学』 36(1): 1-14.
- 桜井 厚, 2002, 『インタビューの社会学 ライフストーリーの聞き方』, せりか書房.
- Schwartz, D., 1989, "Visual ethnography: Using photography in qualitative research." *Qualitative Sociology*, 12(2): 119-154.

- 志村ゆず・鈴木正典（編），2004，『写真でみせる回想法』，弘文堂。
- 都筑 学，2005，「写真投影法による青少年の内面把握の試み」，『教育学論集』47: 223-249.
- Uwe, F., 2001, *Qualitative Forschung*, Reinbek bei Hamburg : Rowohlt. (=2002 小田博志・山本則子・春日常・宮地尚子訳 『質的研究入門：「人間の科学」のための方法論』，春秋社.)
- Ziller, R. C., 1990, *Photographing the self: Methods for observing personal orientations*. Newbury Park, CA: Sage.
- Ziller, R. C., 2000, “Self-counselling through re-authored photo-self-narratives” *Counselling Psychology Quarterly*, 13(3): 265-278.

Abstract

Photo Projective Method as an interview technique

OKAMOTO, Takuya (Kwansei Gakuin University)

ISHIMORI, Masanori (Kyoto Koka Women's University)

KATO, Junzo (University of the Ryukyus)

This paper aims to consider the possibility, potentiality and the limitations of the Photo Projective Method (PPM) as an interview technique. PPM is a new technique developed by Noda (1988) and is based on a projective method that captures the subjects' perceived environment using photographs. This method help us understand the individual's internal world. We have already used PPM to reveal children's safety awareness (Okamoto et al., 2009) and social stereotypes (okamoto et al., 2007). Based on these findings, we tried to apply PPM to an interview to examine the consciousness and involvement of aged people within a community and their life-history. The results show that PPM has four advantages over the regular interview technique; (1) projective and conceptualizing, (2) re-evaluative and rediscovering, (3) objectifying, and (4) mediates between the interviewer and interviewee. Finally, we discussed the limitations of PPM and offered solutions.

KEYWORDS: Photo Projective Method, interview technique, life-history, community

